# 第９章　兵庫津を北前船の最終寄港の母港とした天然の良港性と北風家の奮闘

## はじめに

江戸時代に大坂から、瀬戸内海、日本海を経て蝦夷地までの各湊で必要とされる物資を売買しながら往復した買積船を主体としたのが「北前船」です。国内の生産性が高まり、米経済から金銭経済に移った時代に経済の活性化に大きく寄与しました。その大半の北前船の最終寄港の母港となったのが兵庫津でした。その要因となったのが、兵庫津の天然の良港性と廻船業問屋として兵庫津を支え続けてきた北風家という商人が奮闘してきたからでした。今回は、その天然の良港性とは何かと、北風家が活躍した時代の背景を探ります。

## 天然の良港の生まれた背景

現在の神戸港、かつての兵庫津、大輪田泊が「天然の良港」と言われた要因を確かめていきましょう。それは、和田岬が常時吹く偏西風である南西からの風を防ぎ、冬には大陸の高気圧から吹き出す北風を六甲山系が防ぎ、そして、河川により土砂が運ばれ堆積しても船が停泊できる水深を保つことができたからです。しかも、人工的にではなく、まさに天然のままで維持ができたからです。その構造を確認しましょう。

まず、地殻変動で近畿の地形が生まれ、大阪湖（その後大阪湾）ができた時に、神戸の背後の六甲山系の隆起と沈降は大きく、大阪湾の深さは神戸側が大阪側に比べて深くなりました。さらに琵琶湖と京都盆地からの雨を淀川が、奈良盆地と生駒山地に降る雨を大和川等が、何千年もかけて土砂を運び出し、大阪湾の東側を埋めました。一方で、神戸の背後の六甲山系は急峻であったため、大河川は存在せず、前面の海を広範囲に埋めることがなく、図 9-1 で示すように六甲山系から南の平坦地は 3km 程度で、和田岬まで 5km 程度

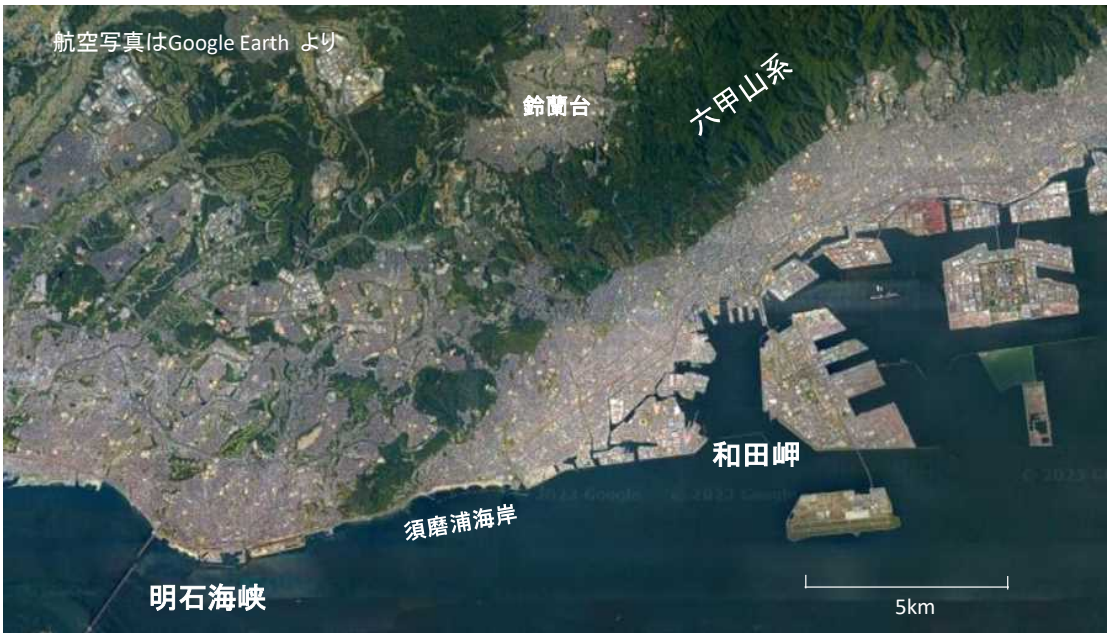


図 9-1　航空写真から見た現在の神戸市の六甲山系と平地部の状況

しかできませんでした。その結果、神戸の港の深度が深く、大阪湾の中での、大型の船の

出入りに適した唯一の港を維持することができたわけです。

**和田岬の誕生に寄与した明石海峡の潮流**

その狭い平坦部の中で、和田岬が出っ張った地形になっていることが判ります。この岬の北側にみなとができたことで、南西の風を防ぐことが自然にできたわけです。では、なぜ和田岬の出っ張り部分ができたのでしょうか。

その答えは、明石海峡に起因します。図 9-1 を見れば理解できるように六甲山系は淡路島と連なっていましたが、縄文時代の温暖期に海面が 6m 近く上昇し、大阪湖の低地部に海水が侵入し、六甲山系が分断され、明石海峡（明石瀬戸）が出現しました。第 8 章の瀬戸内海の誕生で説明しましたように、明石海峡と紀淡海峡や鳴門海峡ができたことで、大阪湾と播磨灘には潮の干満の時間差による海面の高さの差により、一日に 2 回潮流が生じることとなり、現在では明石海峡の深さは 110m あり、潮流の早さは最速部で 7,1 ノット（時速 13.1km）で、河川をはるかにしのぐ早い速度の潮流が流れます。一方で、狭い海峡部から大阪湾の中央に向けて広がるにつれ海流の速度は徐々に遅くなり、和田岬沖付近では 0.3 ノット程度になります。

潮流の速さの差が和田岬を造りました。和田岬より西では、六甲山系背後の土砂が大阪湾に注がれますが、明石海峡の早い潮流のために堆積できず、大阪湾に運ばれてしまいます。粒度の大きな砂は流速が遅くなる須磨浦海岸付近で蓄積し砂浜が形成され、和田岬付近では粒度の小さな砂が堆積の終着点となり、ゆっくりと蓄積し、やがて海面から細長く堤状の天橋立のような「砂嘴」という砂地の地形を形成させました。そして、その内側を六甲山系から運び出された土砂が埋めることで和田岬が形成され、南からの波と風を防ぐことができました。

**湊川が運んだ土砂が創った扇状地の大きさ**

もう一つの要因は、六甲山系から河川によって運ばれた土砂の量の違いです。山から流れ出た河川は、その前面に海があると、運び出す土砂によって水面を埋め、扇状地が形成されます。その規模は河川が運び出した土の量に比例します。山が高く、河川の流域面積が大きければ、平坦地の規模は大きくなります。

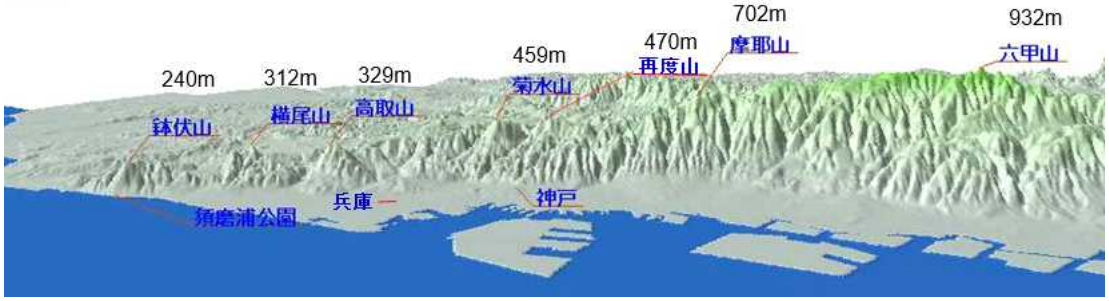


図 9-2　六甲山系の山の頂上の高さ

（下図の出典：http://www62.tok2.com/home/rokkousanroku/umigawa/umigawa.html）

しかし、神戸市の場合、図 9-2 に示すように、神戸市の最高峰である芦屋市境にある六甲山（932m）から西側に山の高さがなだらかに低くなっています。

その高さと地形の詳細を見てみると、現在の湊川の上流に遡ると再度山と菊水山の間に谷を刻んできた天王谷川と、菊水山西側の谷を刻んできた石井川が、六甲山系の北側の地域（鈴蘭台地域：図 9-1 参照）を河川の流域を含んでいます。これは六甲山系の隆起活動の過程で、湊川流域の山の高さがそれほど高くなく、六甲山系背後の丘陵地をも流域に取り込んでいるからです。湊川以東の川は六甲山系の南側しか流域にしていないわけです。そのため、湊川の流域面積が他の河川に比べて大きくなっています。

**表 9-1　六甲山系の南側を流れる河川の流域面積の比較表**

| 河川名 | 流域面積 | 河川名 | 流域面積 |
|---|---|---|---|
| **新湊川** | 約　30 km² | 石屋川 | 約　3 km² |
| 妙法寺川 | 約　12 km² | 住吉川 | 約　11 km² |
| 生田川 | 約　14 km² | 芦屋川 | 約　8 km² |
| 都賀川 | 約　9 km² | | |

［参考］

| 河川名 | 流域面積 |
|---|---|
| 淀川 | 約　8,240 km² |
| 大和川 | 約　1,070 km² |
| 加古川 | 約　1,730 km² |

出典：神戸新聞総合出版センター『歴史が語る湊川』

表 9-1 に現在の神戸市内の表六甲を流れ大阪湾に注ぎ込む主な河川流域面積を示しています。新湊川の流域が他の河川に比べて明らかに広い面積になっています。ただし、明治時代に湊川の流路が替えられて苅藻川の流域も含まれていますので、私自身で新湊川に含まれる苅藻川を除外した旧湊川が集水する流域の面積を簡易的に計算しましたが、流域面積は約 21 km²で、神戸市内の最も代表的な住吉川や生田川の流域面積と比べると約 2 倍弱にもなっています。この集水地域の大きさの違いが運び出される土砂の量の差となり、図 9-3 で示したように、天王谷川と石井川が合流した古湊川（湊川の奈良時代以降に付けられた名前）が数千年にわたり深い海を埋立、六甲山系南の平坦地の中で、和田岬までの幅が他に比べて大きくなり、天然の良港を保持するに十分な機能を持つことができたわけです。

**図 9-3　当時の海岸線と古湊川の流路（推定）**

一方で、表の参考に示した淀川と大和川の流域面積は、旧湊川の 400 倍、50 倍の規模があるため、港を整備しても、運ばれる土砂で埋められ水深が浅くなり、港として使えなくなることが明らかであることを示しています。

**大輪田泊として歴史に登場**

第 1 部第 1 章で説明しましたように、国内を統一したヤマトの国は奈良盆地に都を置き、大和川や瀬戸内海の水運を利用して、中国や朝鮮半島の国との交易や新たな技術の取得を盛んにし、西国の諸国の豪族とも従属関係を確立していきました。

やがて、古代国家は 645 年の大化の改新を経て律令制の国家へと体制を整えていきまし

た。その原則は皇室や豪族の私的所有を廃止して、土地は国家の所有としたことでした。そのため、国は農民に支給する口分田の確保のためと農業の振興のための治水と、集権化による祖（収穫した米の 3 %を納める）・庸（10 日間の労働提供か布を納める）・調（特産物を納める）の朝貢のために欠かせない水運の基盤となるみなと（津）の整備のための土木工事が盛んに行われました。

その中で、奈良時代の東大寺を再建した大僧正行基(668-749)が、瀬戸内海の海運を促進するため、明石海峡の厳しい潮流を潮待ちするために、摂津国と播磨国の間を航海する船が停泊できる「摂播五泊の制」を提唱し、巨石を海岸に突出して敷き並べ、防波堤を築く方法で整備されたと言われています。東から河尻泊（現在の尼崎市の神崎川西岸）、敏馬（みるめ）泊（現在の阪神電鉄西灘駅近くの敏馬神社東）、魚住泊（明石市大久保町の赤根川河口）、韓（から）泊（姫路市的形町福泊）、室生泊（たつの市御津町室津港）でした。しかし、奈良時代中頃から敏馬泊は河川の入り江にあり、河川が運ぶ土砂で埋まり常に人力による浚渫が必要となり、その必要のない天然の良港である「大輪田泊」が評価され、8 世紀の奈良時代から主な潮待ち泊として使われることとなりました。平安時代になると京の都の「外港」としての地位を確立し、港の管理や整備には莫大な費用と労力が必要になるため、国営による修築工事が行われ、天然の良港を維持･保全されることとなりました。

**武士の支配する封建国家体制下の港の支配者の変遷**

平安時代と鎌倉時代をまたぐ間に、武士である平氏が台頭し、その棟梁である平清盛が娘を天皇に嫁がせ、1180 年にその子を天皇（安徳天皇）として即位させ、天皇の外祖父となり、朝廷の権威すらも手中に収め、全国を支配するほどの力を持ちました。清盛は農業経済を基盤とする貴族政治から、通商貿易を基盤とする政治へ転換させる野望をもっていました。そのために、1180 年に京の都から大輪田泊の近くの地に遷都し「福原京」を開き、大輪田泊をはじめ敦賀港、博多港、そして瀬戸内海を統制下に置き、宋との貿易の実権を直接握ることで莫大な利益を独占しようと企図したのでした。

清盛は 1173 年に、大輪田泊の南及び南東からの風に対して船の安全を確保するため、私財をなげうって「経ヶ島」の造成（湾となっている港内部の浅瀬を埋めて道を造り、そこから湾の入口の蓋をするような島状の土地を造成）をしようとする壮大な大改修事業に打って出たのでした。しかし、その絶頂期の栄華は続かず、僅か 170 日で都は京に戻り、失意の内に、熱病にも冒され、1181 年に享年 64 歳で死去したのでした。

未完であった経ヶ島の建設にはその後も難工事が続き、工事は東大寺の再建を行った僧（重源）により朝廷に願い出て、朝廷の威を借りて修理費用を運上米を輸送する船から 1 石につき 1 升の米や置石、周辺地域から埋立材料や、人夫の徴用などにより 1196 年に改築工事が完成しました。その完成後は、船舶の安全性や利便性が大いに高まりました。

一方で、平氏を倒した源氏によって鎌倉に幕府が開かれました（成立年は未確定）。それは貴族支配から武士の支配する新たな封建国家（力の強い権力者に土地を譲って、それを借り受ける形で主従関係を結び、土地を保護してもらう）体制が形成される転換期、まさに、「古代律令国家の崩壊」から「中世封建国家の形成」への変革期の始まりでした。

しかし、鎌倉は太平洋に面した地にあり、船舶の安全な航路もなく、清盛が目指したような通商国家とはならず、旧来の農地を基盤とする土地による封建的支配による権力の構

造に戻したしたに過ぎませんでした。京の都の朝廷と貴族は自ら持つ荘園等からの農産物を収入源として、慎ましく官位の維持に努めるだけとなってしまいました。

この結果、国家レベルでの外国貿易は特に行われなくなり、民間で対宋貿易が盛んに行われました。その中心であった「大輪田泊」は、時期は不明ですが、「みなと」の一つの意味である船が停泊する「泊」のから、船着場があり人の多く集まる港町の地域を意味する「津」の意を込めた「兵庫津」と呼ばれることとなりました。一方で、港の維持･管理は国でも、幕府でもなくなり、全国各地に荘園を持つ有力な寺社が領主に申し出て、主要な港の管理をすることになりました。当時の土木技術は中国からの手法を学ぶしかなく、渡来人や留学僧の知識を寺社は活用できたからでした。また、その費用は、経ヶ島で東大寺が求めた同様の形で徴収しました。各地の交易が盛んになってきた時代でしたので、剰余の利益が相当あり、寺社の建造に寄与することにもなりました。兵庫津では、経ヶ島の北側の入江の北関を東大寺が、南の入江の南関を興福寺が管理することになりました。

鎌倉幕府が滅び、足利尊氏が征夷大将軍として 1336 年に京に幕府を開くと、3 代将軍義満は 1404 年に、明国との間に実質的には朝貢貿易である第 1 次遣明船を京の都の外港である兵庫津から出帆させました。明からの「賜物」は幕府の大きな収入の一つとなり、以降 17 回派遣されました。うち 1481 年の 13 回まで兵庫津から出港したため、再び、国際的交易の港町として発展しました。

しかし、8 代将軍義政の跡継ぎ問題で、管領家の細川家と有力守護大名山名・大内家の間で応仁の乱(1467 ～ 1477)が起こりました。両家は、兵庫津からあがる利益を逃がすまいと、1469 年に兵庫津の地で激しく戦ったため、兵庫津は完全に灰燼に帰しました。応仁の乱以降には、大内家が瀬戸内海を支配したため、細川家は遣明船を土佐沖を迂回して堺（津）を利用するルートを採ることになりました。これを契機に堺津が兵庫津にとって代わって、約 80 年間、日明貿易の中継地、琉球貿易、南蛮貿易の基地として栄え、兵庫津は衰退することとなりました。

応仁の乱は終わりますが、戦乱は地方に移り、室町幕府は力を失い、時代は社会や制度を大きく変えることになりました。従来の身分制度が崩れ、家格より武力が重用され、「下剋上」思想が象徴する戦国時代に突入します。地方領主から台頭した戦国の武将は、治水の技法を含む土木技術に優れていたことと､港から上がる利益は莫大であることを理解し、領内の港の支配を円滑にすることに努めました。武器の調達や兵糧･軍資金を調達するために、複雑な運送業務、船の管理、港湾税の徴収など行政的な管理を担う、いわゆる豪商の存在を必要とし、実力のある商人に港の支配を任せることとなっていきました。

**戦国時代の兵庫津に登場した豪商「正直屋」**

兵庫津は日明貿易の根拠地を堺津に奪われ､国際貿易港としての地位を失いますが､第 8 章で説明しました畿内と西国を結ぶ瀬戸内海航路はまだまだ活発であったため、戦国武将にとって、兵庫津は軍事上極めて重要な港でした。そして、戦国時代の兵庫津に、戦国武将と結び活躍する有力商人が存在しました。小物屋町で土倉（質屋兼金融業）の商いしてきた在地領主の椿井（たるい）家、すなわち初期豪商の「正直屋」でした。

当時の摂津国は管領の細川家が治めていましたが､その職を求めて親族間の争いとなり、阿波の細川家が暗躍して勢力下に治めました。やがて、その家臣だった三好長慶（ながよし）が畿内･

四国内で大きな力を持ち、細川家を退け、さらに 13 代将軍足利義輝を近江に追いやり、1553 年に長慶は入京し、将軍に代わって畿内の覇権を確立するまでになりました。兵庫津は四国･淡路を拠点とする長慶にとって、畿内に地歩を築くため重要な港になり、豪商正直屋に安堵状を発給し、保護と特権を与えたわけです。

奈良に逃れていた足利義昭（後の 15 代将軍）は、全国の諸大名に三好勢を討伐して自らを将軍として擁立するよう檄を飛ばしました。織田信長が、1568 年に要請に応じた形で義昭を奉じて上洛し、政治的実権を手にします。その後義昭と対立し、1573 年に将軍義昭を京から追放し、ここに室町時代の幕を閉じることとなりました。

信長が京に入京した翌年の 1569 年に、信長に反抗した堺や尼崎と異なり、兵庫津は協力する態度を示したことで、正直屋は下知状で、知行の安堵、徳政（金融業者に借金を帳消しにする政策）の免除を許されています。

また、羽柴秀吉とは、播磨平定をする過程で三木城の攻略にあたって、正直屋から兵糧の調達や輸送の面で支援を受けたので、正直屋には明石郡の徳政免除を約束しました。1582 年の明智光秀の謀反による信長の暗殺後の 1585 年信長の後継者として天下人（関白）となった豊臣秀吉は、兵庫津を西国と京･大坂を結ぶ経済的にも軍事的にも重要な港として、直轄（蔵入）地としての位置づけを与え、関係のあった正直屋に船役銭、諸座公事銭などの徴収を任せることとしました。

**兵庫城の建設、湊川の付け替えによる新たな港町としての発展**

戦国時代の兵庫津は単なる瀬戸内海交易の中心港だけではなく、戦略上の拠点としての一面から、時代に翻弄されていきました。

信長は天下取りには兵力を金で傭兵する必要から、城下町の経済力を高めるため、楽市楽座を採用し、商業者の組合のような存在の座の廃止とその特権を与えてきた荘園制で大地主となってきた社寺の権限を奪うことを進めました。その最終局面として、浄土真宗の総本山である大坂の石山本願寺との 10 年におよぶ戦いが 1570 年に始まりました。本願寺を支援するため瀬戸内海を船で攻め上がる毛利勢の水軍との連絡遮断のため、部下の伊丹を支配する荒木村重に花隈城を築城させました。しかし、村重は毛利家に接近し謀反となり、村重は伊丹城と花隈城を攻められ、毛利家を頼って西国に逃げました。

信長は花隈城の攻略の功のあった池田恒興に兵庫津を含む摂津国を与え、その後 1581 年に毛利水軍を監視する目的で、兵庫津の地に花隈城の天守閣などを解体させ、その用材を移築させて兵庫城を築かせました。

しかし、1582 年に本能寺の変で信長が自刃した後、天下取りの地位を手に入れた秀吉は恒興を美濃国に移封し、兵庫津を含む大坂を秀吉の直轄地としました。

海陸の要所となった兵庫津は、西国街道への出入りに 4 門（湊川惣門や柳原惣門など）の番所や札場が置かれました。町の防御のため、周囲を延長 1,364 ｍの半円形の高い土堤を築き、外側に幅 3.6 ｍの掘が築かれました。土堤内に戦闘時の防衛のため寺を集め寺町とし、土塁や堀で囲った惣構型の城下町に民衆を集め港町としても整備されました。

江戸時代となり平和をとりもどした時代の兵庫津は、港町としてあらためて繁栄を取り戻すこととなり町の姿は、正直屋の椿井家が所蔵していた図 9-4 の「元禄兵庫津絵図」という 100 年後の元禄時代の図が参考になります。

その中で、当時の古湊川の和田岬方面に流れていた流路が（旧）湊川に付け替えられ、土砂の搬入を回避して兵庫津の港としての機能を維持できた訳ですが、いつ、誰の手で行われたのか明確な歴史上の根拠がないという不思議があります。

一説では、戦国時代に、瀬戸内海を西から攻め上がる毛利家の勢力への防備のため、花隈城の築城の際に流路を替えた説、あるいは花隈城を移築して兵庫城を築いた際に北側からの攻撃を防備するために、古湊川を旧湊川の方へ付け替えたとする説です（神木・崎山）。しかし、それを説明する明白な資料がなく、それ以前の時期ではないかとする説もあります（落合）。

**図 9-4 付け替えられた湊川と兵庫津の位置関係**
（出典:落合重信『増訂　神戸の歴史　通史編』）

定説がないなら、兵庫津の港としての繁栄の経過の中で、まちを流れる古湊川の被害に常に悩まされた兵庫津の商人や町人が、必要に駆られて、花隈城あるいは、兵庫城の建設の際に協力を申し出て、あるいは、独自に付け替えたとする考えを私は敢えてロマン（物語）として提案したい。河川は生活用水としての水源として無くてはなりませんが、大雨による洪水被害があり、その度に運ばれる土砂に悩まされたはずです。特に運ばれた土砂で、港の停泊地が埋められることは海運関係者には死活の問題であったはずです。しかも、今日のような浚渫技術がない当時は、土砂に埋められ喪失した機能を復旧することは不可能です。平安から鎌倉初期に苦労して築いた経ヶ島が時間の経過の中で、埋め立てた歴史もなく、その姿がなくなっています。海運関係者には古湊川がさらに土砂を運び天然の良港を埋めれば兵庫津の地位はどうなるのかという恐怖心があったに違いありません。

そこで、みなととまちの繁栄を守るための対策として、当時の技術で可能な、古湊川の流路を兵庫津の外の位置に付け替える必要が生じます。新たな流路を掘削する工事は、正直屋等の海運関係者の蓄財で十分であったと考えても不思議ではありません。古湊川の流れは歴史上の主人公とはならなかった兵庫津を支えた商人・町人の力で、バイパスとしての湊川に流路を付け替えたと考えるのも一つの考えではないでしょうか。そしてその結果、洪水の危険性から守られ、江戸時代には人口 2 万人が住む当時としては大商港都市として、その地位を築く背景になったと言えるのではないでしょうか。

### 平和な時代となった江戸時代の兵庫津と北風家の台頭

時代は 1598 年に豊臣秀吉が死去し、1600 年関ヶ原の戦い、1603 年徳川家康が征夷大将軍、江戸幕府の開府で政治の中心は江戸に移り江戸時代になります。さらに、1614 年大坂冬の陣、1615 年大坂夏の陣を経て、敗北した豊臣家の所領は徳川幕府領となり、その後大名の領地の配置換えを経て、幕藩体制が整い、パクス・トクガワーナによる平和な時代が始まることとなりました。

豊臣家の所領地だった大坂は、大坂の陣以降の復興で市街地の開発と堀川の掘削が進み、復興が終わった 1620 年に幕府直轄地として西国大名の動静を監察する大坂城代を置くこ

とになりました。大坂の河川の掘削はその後も進められ、1644 年には運河の総延長が約 16km に達し、大きな船は運河には入れないため水深のある安治川の河口に、大坂と江戸間を往復する菱垣廻船のほか、諸国の船が積み荷を満載して集まりました。

大坂から西と兵庫津の地域は、幕府直轄地にはならずに、大坂を守衛する重要な地域として、代々譜代大名（戸田、青山、松平）家の支配する尼崎藩の支配下に約 150 年間置かれることになりました。旧兵庫城に陣屋が置かれ駐在する奉行が兵庫津を管理しました。

1633 年の「鎖国令」等によって、室町時代の末期に対外貿易の拠点となっていた堺津は旧時の面影をすっかり失い、それに引き換え兵庫津は本来の力を発揮し始めました。

将軍から通商渡航を許可されたオランダ人が 5 年毎の江戸城参礼の途中に寄港したことや、朝鮮通信使として李氏朝鮮国より将軍への使節団が 12 回来航し、うち 11 回は兵庫津に寄港し、兵庫津は国際港としても機能を果たしました。

徳川時代の新しい体制下の兵庫津の商人の中心に現れたのが、鍛冶屋町に居を構え兵庫津に入津した廻船の積み荷を荷受けし、売りさばく諸問屋を営んでいた「北風家」でした。

北風家は『北風家通事』によれば、実は大変古くから兵庫の浜で町方の王的な存在で、神功皇后以来の 4 世紀頃からとされています。そして家を歴史的に有名にした事件が起こります。武家が支配した鎌倉幕府が滅び、後醍醐天皇による建武の新政の時代に、兵庫の地生えの勢力は天皇側の公家側に与しました。1336 年 2 月に武家側の足利尊氏に天皇に謀反の疑いで、武将新田義貞に追悼令が出されたため、九州に逃げようと兵庫まで退却し、ここで軍船 300 艘を整え、諸将とともに乗船しようとしました。そこに北風家一党が船で襲撃をしました。当日は北風が激しく吹く夜で、足利方の船団は大きく乱されました。その功績に天皇方の新田義貞は喜び、この時までこの一族の姓「白藤」を新姓として「喜多風」を与えて、当時第 44 代の当主惟村に、自分の名の一字をあたえ貞村と名乗らせたのでした。この家系伝承から、北風家当主には「貞」の字の付く字が使われるようになりました。しかし、その後足利尊氏の勢力が盛り返し、征夷大将軍となり、後に南北朝時代（北朝は武家側、南朝は公家側）となり、北朝主体の時代になった際に、姓を「北風」と変更し、その後は長らく兵庫津で慎ましく生業を続けることとなったわけです。そして、徳川の平和の時代になり、再度、表舞台に登場することとなりました。

満を持していた北風家は 1637 年の島原の乱を契機に西国の船が、大坂の河口が浅瀬で満潮までの潮待ちや荷物の積み換えに兵庫津に停泊したに過ぎなかったのですが、荷主や船頭たちを北風家の屋敷に泊め、大浴場に入浴させ、食膳には銚子 1 本を添えて饗し、大坂では受けられない厚遇を無償で与えました。これが契機で、その後兵庫津に荷揚げするようになり、同家が兵庫津の倉庫等を支配することとなっていきました。

1639 年には、加賀藩の年貢米 1 万石を、後に大坂の米市場を創る淀屋介庵と親しかった北風彦太郎が 250 石、300 石積みの廻船で、従来の敦賀、琵琶湖を運ぶルートとは異なる、山陰航路、関門海峡、瀬戸内海を通り、積み換えなしで、損傷なく、安い費用で大阪に廻漕し、淀屋に販売委託をした経緯があります。これは、後の 1672 年に河村瑞賢により始まり、兵庫津に近世の繁栄をもたらす西廻り航路の開拓前に、リスクを顧みない廻船業の姿を示したもので、北風家が北国との海運に大きな力を持つキッカケとなりました。

また、上方の池田や伊丹からの美味しい酒を江戸まで陸路で 2 ヶ月かかっていたのを、海路で大量に運ぶことを試みたのも、北風彦太郎でした。自らの 3 隻の廻船を使い、太平

洋の遠州灘の荒波をつききって、江戸まで廻漕し、上方の“しぼりたて”酒を、20 日程度で大量に運ぶことができました。後に、菱垣廻船でも酒を積むことになり、「下り酒」のブームの火付け役になり、それを機に菱垣廻船と兵庫津の関係が強くなりました。

こうして表舞台に立った北風家は、荘右衛門家（恒村の末裔）、六右衛門家、彦太郎家などの縁者の問屋 9 家が中心となって、兵庫津の港湾に関わる業務を担っていきました。

北風家と対照的になったのが、戦国時代に兵庫津の豪商となった正直屋です。兵庫津を支配した戦国大名に、戦費や兵糧の調達する見返りに、港の商いに庇護を得て栄華を手にしてきました。しかし、最終局面で豊臣家の庇護を受けたことと、大坂の陣で徳川家が勝利し、兵庫津が譜代大名の支配となり、その後の徳川幕府の続く期間は、兵庫津では地味な業を続けることになったのではないでしょうか。

**幕藩体制（幕府と尼崎藩）による大坂優先で兵庫津の停滞**

幕府や各藩からの年貢米は天下の台所大坂で換金するため、それまでの敦賀、琵琶湖、淀川経由に比べて、日数が短く費用も安い西廻り航路が定着し、荷物を大量に積める大型の千石船（150 トンの米の積載能力で米を最高は 2,400 俵積み）も登場しました。船頭を歓待してくれる兵庫津に寄港し、大坂まで小船に積み替える船が増えていきました。

兵庫津はもともと大坂の外港的な役割を持つのが宿命でした。それは、大坂の川が浅く、諸国からの廻船が満潮時以外はそのまま川を上りにくかったため、積み荷を豊かな水深の兵庫津で渡海船に積み替え、大坂の川中を上って市中の諸藩蔵屋敷や問屋へ運ぶ必要があったからでした。そのため、兵庫津の問屋は、江戸と上方を結ぶ菱垣廻船問屋の系列下に置かれていました。しかし、現実に大坂の川や運河では、河口から蔵屋敷に川船で荷を運ぶ上荷船（20 石積）・茶船（10 石積）仲間が幕府直轄の営業特権（冥加金等は幕府に払う）を持っていたので、尼崎藩の時代には、兵庫津の渡海船がどこまで運搬を受け持つのかが問題になっていました。

幕府は大坂市中への物流の円滑な流入を重要視していたので、上荷船・茶船仲間は、川中を通行する船を相手に、再三訴訟を起こして、新規参入を排除しました。結果、兵庫津や尼ヶ崎の渡海船は、安治川河口などで上荷船等に積み替えることが命じられました。それは、諸国の回船業者や荷主からすれば、兵庫津で渡海船に積み替えても、再び安治川で積み替えねばならず、二度手間となり、費用もかさむことになりました。1747 年に兵庫津での渡海船に頼らないで、大坂の河口に直行することが起こり、兵庫津は大坂町奉行所に訴えましたが、大坂への円滑な物資流入が優先され敗訴となりました。こうして大坂の外港的な役割は幕藩体制下の直轄地優先で低下し、兵庫津の経済力が停滞する時期を迎えなければならなくなりました。

**大坂の外港的役割から脱皮し北前船の最終寄港の母港へ発展**

大坂の外港的役割に甘んじる限り兵庫津の発展ができない事情を察した北風宗右衛門家の貞幹（さだもと）は店方会計とは別に、店や個人の所有の廻船によって、北前交易で蝦夷地等の海産物の売り買いを展開する「買積船」という新しい廻船経営に活路を見い出しました。

それまでは、荷主の物資を輸送するだけの「賃積船」が主流で、船頭は単に雇われて目的地までの輸送を担当していただけでした。買積船とは、船主や船頭が自らの資本をもと

に、最も価格の安い湊で仕入れた物品を、各地で巡航しながら最も高い湊で販売するという経営体でした。瀬戸内海や日本海の湊を結ぶ形で蝦夷まで 1 年で往復する「北前船」はこの買積船の代表格で、海難で損失を被る危険はありますが、船頭（自前船や契約）の相場を読む才覚により、遠隔地間の価格差を利用すれば、一航海の商いで千両（約 1 億円）の利益を得る現代版「動く総合商社」となりました。

それは、貨幣経済が一段と発展し、上方の農業が綿や藍などの商品作物に力を入れ、肥料として蝦夷地のニシン等の海産物が欠かせない社会の仕組みが 18 世紀半ばにできあがり、この流通機構を担うものとして北前船がなくてはならない存在になったからでした。

北前船は、利益を求めて大型化しましたので、大坂の港には停泊できないため、深度のある兵庫津で積み荷の大半を下ろすことになり、兵庫津は正に北前船にとっての最終寄港地、すなわち母港となっていったわけです。

また、瀬戸内や九州からの様々な物産の集積地にもなっていき、1 日に百隻を越す大型船が出入りするようになりました。さらに、明石海峡は極めて潮流が早く、しかも 1 日 2 回反転するため、その潮待ち港としても停泊、出港待ちの船で賑わいました。

全国の船乗りが兵庫津に寄港すると、北風の船宿で、司馬遼太郎の『菜の花の沖』では「北風の湯」として見事にその情景を活写している風呂で湯を浴びてもらい、酒の振る舞いでもてなし、世間話や苦労話の合間に、全国各地の物産の荷動きなどの重要な情報交換の場となり、才覚と技量が求められる船頭たちの交流サロン、情報センターとなり、さらなる兵庫津への寄港を推進させることとなりました。兵庫津を発展させ、豪商となった北風家は「兵庫の北風か、北風の兵庫か」（「買積みの荷を積んで兵庫津に行き、北風家の店頭で売る」の船頭間の合い言葉でもある）と言われたほどでした。兵庫津は船頭たちにとっても、長期の神経の使う船の責任ある運航から解放され、温かく迎えてくれる母なる港になったのです。

**北風家の支援で活躍した工樂松右衛門と高田屋嘉兵衛**

北風家は兵庫津で「これは使える」と見込んだ人材に投資して、育てることで、兵庫津の繁栄に結びつけ、自ら利益を獲得する戦略も展開しました。北風家が育てて、北前船の船持ち船頭だけではなく、日本の海事に関わる分野で活躍した代表が、工樂松右衛門であり、高田屋嘉兵衛でした。両人の活躍について簡単に説明します。

工樂松右衛門（旧姓宮本：1743 － 1812）は、播州高砂の漁師から、兵庫津の船具商に奉公し、大胆不敵な操船技法で、34 歳で大型船の沖船頭（雇われ船頭）を務めた。操船とともに、多種多様な船具の工作にも才覚を現した。弱点だった帆の改良に取り組み、試作を始めたとき、北風貞幹はその発明工夫の異能に着目し、7 年にわたる物心両面の支援をしたことで、太糸の播州木綿を使った厚地広範の丈夫な帆布を織り上げた画期的な「松右衛門帆」を 1785 年に完成させました。25 反の 1 枚帆は真艫の風を受けると船の航行速度の向上や、和船の大型化をもたらし、廻漕の利益を増加させました。その帆を求めて兵庫津に入津する船が増え、津の地位は向上し、繁栄に繋がることとなりました。彼は、千石船の「買積船」を運行するだけではなく、海事に関わる公益奉仕に努めたいと、独立自営を 1792 年に目指した際に、北風家の支援を受け、資金を調達することができ、御影屋の身代を譲り受け、「御影屋松右衛門」の開業（店舗兼工房）ができました。その後義弟

等に廻漕事業や織帆販売事業を任せ、公益事業として幕府や諸藩の求めに応じて港湾普請（浚渫･築港）の土木普請（幕命による択捉島での船繋場築造・箱館築島の船渠築造、姫路藩からの高砂湊、小倉藩の宇島湊、備前福山藩の鞆の浦湊、宇和島藩の宇和島湊）や造船（小倉藩の相生丸築造）に貢献しました。幕府公儀より蝦夷地開発における構築技能の評価から「工夫して楽しむ」という「工樂」姓を与えられて「工樂松右衛門」と名乗り、苗字帯刀も許されることとになりました（詳細は『工樂松右衛門伝』を参照ください）。

高田屋嘉兵衛（1769 － 1827）は、淡路島の貧家に生まれで船乗りになるしかなく、22歳で淡路島出身の兵庫津の和泉屋で水主となり、船乗りとしての知識や技術を身につけました。樽廻船で江戸への灘の新酒の酒積み競争に毎回 1 番船の名誉を勝ち得、沖船頭として頭角を現します。その操船航海の才を見込んだ北風貞幹のリスクがあるが利益の大きな仕事委託の支援も得て、稼いだ資金で、28 歳で 1,500 石積「辰悦丸」を新造し、船持船頭となり、本州各地の湊で産物を買い集めて上方に持ち込み大成功します。1796 年には兄弟と力を合わせて、蝦夷地まで手を広げます。ただし当時の蝦夷地を領地とした松前藩の城下の福山湊や江差湊は既に近江や江戸の商人が力を持っていたため、1798 年には幕府の蝦夷地開発計画で脚光を浴び始めた箱館湊（現：函館）に拠点（支店）を置き、現在の函館のまちの基礎を作ります。1799 年に幕府による第 1 次蝦夷地直轄(~1822)は、幕府と嘉兵衛を結びつける契機となり、幕府の物資の輸送にあたることとなり、また、国後と択捉の間の択捉航路を開拓しました。1800 年に兵庫津の西出町に「諸国物産運漕高田屋嘉兵衛」としての「高田屋」本店を置き独立します。1801 年には幕府の役人「蝦夷地常雇船頭」任じられ、苗字帯刀を許されました。その後、択捉、根室、幌泉の場所を請け負い、東蝦夷地での最大の場所請負人（漁場を経営し、アイヌと交易し、運上金を藩や国に納める）となりました。大型北前船 10 隻を建造し、兵庫の本店の他、大坂、江戸、函館に支店を置き、東北、北海道（蝦夷地）との交易で一代を築き、蝦夷地の産物は自前の北前船で兵庫津に大量に運んだことで、兵庫津の繁栄を極限にまで高めました。

1811 年に「ゴローニン事件」が起こり、その交換の人質として嘉兵衛はロシアに拿捕され、カムチャッカに連行されます。絶望の淵にあっても、ロシア人との間に、人間はわかり合えることを訴え、1813 年に函館に戻され、両国の仲介役として、ゴローニンの釈放に至る和解を成し遂げ、事件は解決しました。町人嘉兵衛はたった一人で「民間外交」を展開し、難しい国際紛争を解決したのでした（詳細は『菜の花の沖』を参照ください）。

その後、1823 年に幕府の蝦夷地直轄が終了し、松前藩に復領されると、幕府の後ろ盾を失った高田屋（1824 年に本店を函館に移転）は、松前藩に密貿易の疑いをかけられ、取り潰されました。嘉兵衛は隠退し、故郷の淡路島に戻り、1827 年に没しました。

**幕府直轄支配下後の兵庫津商人の株仲間形成の努力**

1769 年の「上知令」により、兵庫津は尼崎藩領から幕府直轄領になりました。幕府領に編入された地域の中で、西宮と兵庫津は直接大坂奉行の支配に移され、残りは大坂の代官の支配を受けることとなりました。兵庫津の行政機関は、旧兵庫城の陣屋が手広であるとして縮小され、大坂奉行所から勤番与力、同心各 1 名を駐在させ、勤番所としました。余剰地は町人に払い下げられました。

上知令は､この頃の幕政の中枢で経済政策を重視し商業発展に注目した老中田沼意次が、

兵庫津や酒造で名高くなった灘目三郷・西宮灘、また絞油業が盛んな西摂津の村々を直轄地に編入して、幕府の増収を図るとともに、「天下の台所」大坂の物流中枢を維持･強化したためと言われています。そのために、上知令直後に、大坂の商人の問屋株(排他的に営業権を幕府から保障された同業者共同組織)を認め、株仲間加入者に営業特権を認める代わりに運上金や冥加金を幕府に納入させることとなりました。しかし、兵庫の問屋株は大坂重視のため幕府に否定されました。その結果、兵庫津の事業は厳しい状況に置かれました。商売を続けるためには、兵庫商人は大坂の商人から多額の費用で株を借受して、営業をせざるを得ないこととなりました。法外な借株料を課せられた兵庫商人は奉行所に訴えますが、調停は不調に終わってしまいます。上知令で尼崎藩からの保護を失ったことを自覚し、兵庫商人の間で商権を維持する必要から、兵庫津独自の株仲間を結成して問屋株を大坂から買収し、初めて自己の株とすることになりました。その際、北風荘右衛門貞幹は所有している倉庫を抵当に借り入れをして、買収したと言われています。このようにして、兵庫に株仲間として茶屋株、定芝居株、絞油業を皮切りに、1775 年には商業上最も大切な「3 仲間」と言われた諸問屋株・穀物仲買株・干鰯(ほしか)仲買株などが次々認められました。その見返りにそれぞれの冥加金を大坂の奉行所に納入することとなりました。

3 仲間の中で諸問屋仲間は島上町の会所で事務を執り、厳重な規約を作り、諸国の廻船積載の貨物の取り扱い口銭を持って収入としました。兵庫津に廻漕された貨物の売買や、水揚げ積み替えも独占的に行います。浜先に問屋各自の小旗を立てて水揚げし、倉庫に納めました。入津貨物が増加するについて倉庫の数も増え、北風家はその全体を支配する力を持つことになりました。

穀物仲買仲間はその会所を宮内町に置き、厳重な取り扱い協定書を申し合わせ、大坂堂島米市場のように米穀の空売買も盛んに取引されました。

干鰯仲間は、幕府領になる以前から、北前船の買積船による兵庫津独特の商いであり、会所は佐比江町に設け、蝦夷からの干鰯の取扱量はさらに増大することになりました。

**商品経済という大衆市場の拡大による兵庫津のさらなる発展へ**

大型船が停泊できる兵庫津ゆえに、大坂へ廻漕する貨物も兵庫問屋が直接引き受けるところとなり、買積船の入港船舶の増加につれてその勢いを助長し、米穀や肥料など大坂より兵庫で取引されるものが多くなっていきました。室町時代から天然の良港として、物資の集散市場としての地位があったからこそ、幕府を介入や、行政上の変革があっても、内海唯一の集散市場として栄えていくことになりました。

さらに､知多半島を母港にして下関から江戸までの広い商圏とする尾州廻船の内界船が、北前船と同様の買積船で、北前船の集まる兵庫津を西国最大の取引先としていたことが判明しています。瀬戸内で物資を高値で買い占め、大坂以外へ売り払ってしまう内界船の存在が、全国的な商品経済の広がりを背景に、新しい流通の担い手として、幕藩体制の市場を解体していくことにもなりました。

このように、一般庶民の生活水準が向上し、大都市以外からも高値で購入する引き合いが来ていることが流通の仕組みを変える背景になったわけです。幕府は「天下の台所」大坂への物資の量と価格で安定供給ができれば、江戸の消費生活も保てる視点からだけを第 1 に考え、流通の仕組みの変化に対応しようとしなかった結果、次第に大坂へ流入する物

資が減少してしまいました。19 世紀になると極めて深刻となり、瀬戸物で 7 割減、木綿や鉄で 6 割も減少しました。人口でみると、大坂は明治維新前の段階では 100 年前（1766 年）と比べ 4 分の 3（42 万→ 32 万人）に減っています。しかし、兵庫津は同じ人口 2 万人規模を保っていました。内海船との取引では、船の道具や部品が多く占めているから、造船や修理などの工業品でも兵庫津が一大拠点になっていたことがわかりました。

こうして兵庫津は、北前船がカバーする北日本から西日本にかけての地域と、内界船が拠点とする江戸東海地方を結合する中継港、すなわち国の流通の中心地としての地位を得ました。大坂を補完する外港から、長距離輸送力や工業力も備えた自立した港町への性格に大きく転換させたのでした。すなわち、商品経済という庶民の市場の拡大という最も「民」らしい形で港の機能を発揮することになっていったのでした。

**おわりに**

江戸時代は 1868 年の兵庫開港と同時に終焉しました。兵庫津の東に新たに神戸港が整備され、天然の良港を維持しつつ、日本の近代化を支える国際港として、また、兵庫津の地域には日本の工業化を先導する重工業が立地し、神戸と兵庫で新しい時代の港湾工業都市として発展していくことになりました。

江戸時代の兵庫津の発展を支えてきた北風荘右衛門家の正造は、幕末時には勤王憂国の豪商として西郷隆盛や伊藤博文等と連絡を取り、討幕運動に奔走し、そのための資金を惜しみなく提供し、明治維新を成功させることに貢献しました。また、姫路藩に討伐軍が迫ったときに、軍に資金を出したことで、姫路城（1993 年に日本初の世界遺産登録）の無血開城に成功し、姫路城を戊辰の戦火から救いました。神戸港開港後には、大阪－神戸間の鉄道の敷設に、現在の JR 神戸駅付近の土地を献納し、湊川神社の建立、湊川流路を新湊川に付け替える工事などにも奔走しました。しかし、一方で、米･肥料の思惑買いに失敗し、政府の緊縮政策あおりを受けるなどの悪条件が重なって、豪商北風家はあっけなく倒産してしまいました。そして、その後の神戸港の発展の歴史から、風のように姿を消すことになりました。

**〈参考文献〉**


・落合重信、『増訂　神戸の歴史　通史編』、後藤書店、1989 年（増訂版）
・神木哲男・崎山昌廣編、『歴史街道のターミナル』、神戸新聞総合出版センター、1996 年
・黒部亨、『兵庫人国記』、神戸新聞総合出版センター、1994 年
・神戸市立博物館、『特別展　よみがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる』、2004 年
・司馬遼太郎、『菜の花の沖　1 ～ 6､』、文春文庫、2000 年（新装版）
・長尾義三、『物語日本の土木史』、鹿島出版会、1985 年、
・西川光一、『神戸港の歴史』、冬鵲房、1982 年
・松田裕之、『近世海事の革新者　工樂松右衛門伝－公益に尽くした 70 年』、冨山房インターナショナル、2022 年
・脇本祐一、『豪商たちの時代－徳川三百年は「あきんど」が創った』、日本経済新聞社、2006 年